




## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3052 号	氏名	安田 亮輔
審査担当者	主査	加治 建	
	副主査	溝口 亮志	
	副主査	川口 巧	
主論文題目: Serum leucine-rich alpha-2 glycoprotein and calprotectin in children with inflammatory bowel disease: A multicenter study in Japan (小児 IBD における血清 LRG とカルプロテクチン: 多施設研究)			

### 審査結果の要旨 (意見)

小児 inflammatory bowel disease (IBD) の疾患活動性を評価する血清 マーカーとして用いられている血清 leucine-rich alpha-2 glycoprotein (LRG) と血清カルプロテクチン (CLP) の有用性について比較検討した。対象は 17 歳未満のクローン病 (CD) 74 例、潰瘍性大腸炎 (UC) 77 例、正常コントロール (NC) 22 例を 11 施設から後方視的に登録した。CD と UC の疾患活動性をそれぞれ臨床的活動期と寛解期の 2 群に分け、血清 LRG と血清 CLP を測定した。結果は、CD 活動期の LRG は寛解期 ( $P < 0.001$ ) および NC ( $P < 0.001$ ) より有意に上昇していた。CD 活動期の CLP は寛解期 ( $P < 0.05$ ) および NC ( $P < 0.05$ ) より有意に上昇していた。UC 活動期の LRG は寛解期 ( $P < 0.01$ ) より有意に上昇し、NC とは有意差がなかった。UC 活動期の CLP は寛解期および NC と有意差がなかった。活動・寛解期を鑑別する ROC 解析では、LRG の AUC (CD/UC: 0.77/0.70) は、CLP、CRP、赤沈より、CD と UC とともに大きかった。小児 IBD における疾患活動性の評価マーカーとして、血清 LRG は血清 CLP より有用であり、特に CD で優れていた。本論文は、小児 IBD の疾患活動性マーカーとして血清 LRG が CD で有用性が高いことを明らかにした論文であり、臨床的価値が高く博士論文として評価できる研究内容である。

### 論文要旨

血清 leucine-rich alpha-2 glycoprotein (LRG) と血清カルプロテクチン (CLP) は、疾患活動性の評価マーカーとして 成人 IBD で有用であるが、小児 IBD で両者を比較した報告は世界的にもない。

本研究の目標は小児 IBD の疾患活動性を評価する血清マーカーとして、LRG と CLP のどちらが有用か明らかにすることである。

対象は、17 歳未満のクローン病 (CD)、潰瘍性大腸炎 (UC)、正常コントロール (NC) を 11 施設から後方視的に登録した。CD と UC は臨床的活動・寛解期の 2 群に分け、LRG と CLP を測定し比較検討した。CD 74 例、UC 77 例、NC 22 例の 173 例を解析した。

結果は、CD 活動期の LRG は寛解期 ( $P < 0.001$ ) および NC ( $P < 0.001$ ) より有意に上昇していた。CD 活動期の CLP は寛解期 ( $P < 0.05$ ) および NC ( $P < 0.05$ ) より有意に上昇していた。UC 活動期の LRG は寛解期 ( $P < 0.01$ ) より有意に上昇していたが、NC とは有意差がなかった。UC 活動期の CLP は寛解期および NC と有意差がなかった。活動・寛解期を鑑別する ROC 解析では、LRG の AUC (CD/UC: 0.77/0.70) は、CLP、CRP、赤沈より、CD と UC とともに大きかった。

小児 IBD における疾患活動性の評価マーカーとして、血清 LRG は血清 CLP より有用であり、特に CD で優れていた。